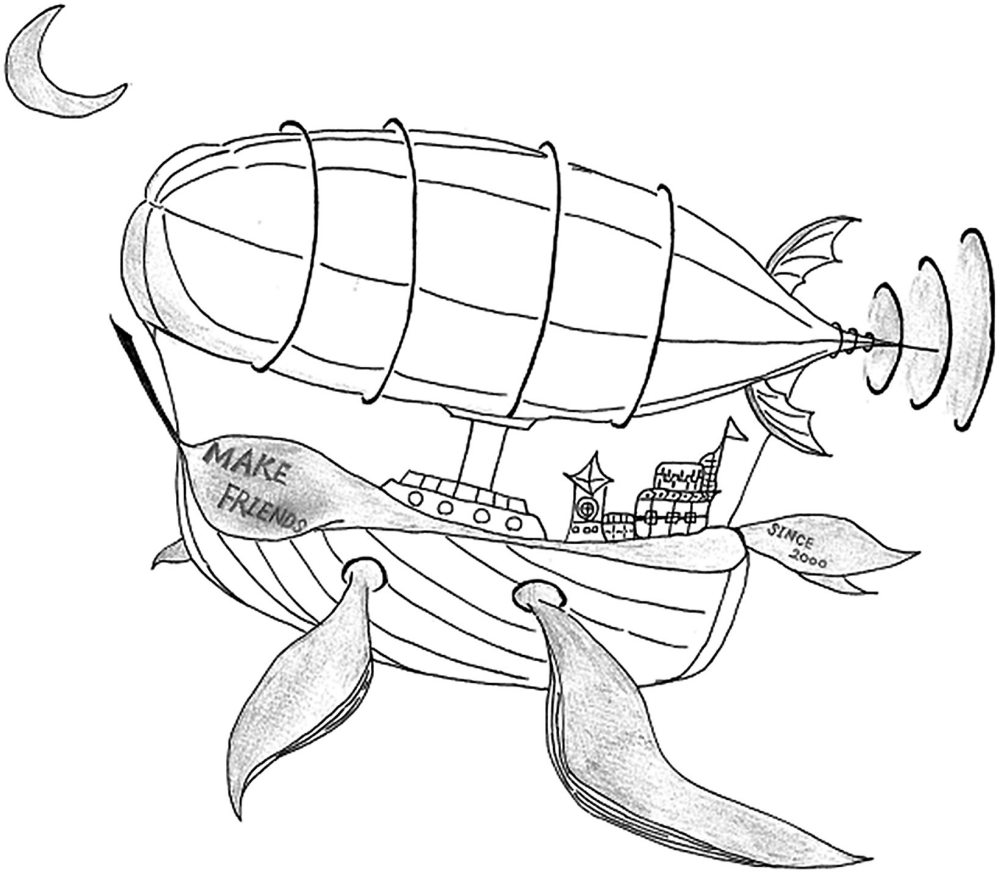
2023（令和５）年度

熊本大学教育学部フレンドシップ事業

実施・成果報告書



熊 本 大 学 教 育 学 部

附 属 教 育 実 践 総 合 セ ン タ ー

2024（令和６）年３月

目　　次

はじめに

1　2023年度（令和５年度）フレンドシップ事業シンポジウム開催にあたって
……　熊本大学教育学部長　藤　田　　豊　1
2　ユースワークとしてのフレンドシップ事業
……　熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長　山　城　千　秋　2

Ⅰ　メイクフレンズ活動の実施報告

1　メイクフレンズ活動体系について　……　メイクフレンズ船長　緒　方　美　優　5
2　2023年度熊本大学メイクフレンズ学生名簿　……　10
3　2023度メイクフレンズ年間活動一覧　……　13
4　2023年度メイクフレンズ外部依頼による活動一覧　……　16
5　2023年度活動報告　……　17
（１）メイクフレンズ「中央ホール班」活動報告書
（２）メイクフレンズ「秋津ホール班」活動報告書
（３）メイクフレンズ「南部・幸田単発班」活動報告書
（４）メイクフレンズ「五福プランナー班」活動報告書
（５）メイクフレンズ「東部プランナー班」活動報告書
6　2023（令和５）年度熊本大学教育学部フレンドシップ事業
シンポジウム・分科会開催要項　……　52

Ⅱ　分科会の実施報告

1　メイクフレンズ学生自主企画分科会　……　57
2　実施計画　……　58
3　実施報告　……　60
4　分科会の事後アンケート結果　……　72

Ⅲ　教育実践総合センター教員からのメッセージ

1　これから、ここから
……　熊本大学大学院教育学研究科（専任）
教育学部附属教育実践総合センター（兼務）・フレンドシップ事業担当
中　山　玄　三　81

2023年度（令和５年度）フレンドシップ事業
シンポジウム開催にあたって

熊本大学教育学部長　藤　田　　豊

今年度フレンドシップ事業シンポジウムの開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

コロナ禍の影響を受けて、本シンポジウムは令和元年度、２年度と続けて開催が見送られて来ました。３年度はZoomによる遠隔形式で開催され、４年度からは対面形式に戻り、今年度も対面形式で開催されますこと、本当に嬉しく思います。

この５年間にわたる事業の運営は、コロナ禍の影響を直接受けながらも、年度ごとの皆さんの努力で運営を続けて来られました。

これまでの活動を簡単に振返りますと、令和元年度までは何とかメイクフレンズの３本柱（単発班企画、ホール班企画、プランナー班企画）の活動が行われたものの、それら一連の学修成果を発表する機会（シンポジウム）は得られませんでした。令和２年度になると活動そのものが年間通じて実施されず、各班それぞれに開催できないまま、活動を終えなければならないという危機的な状況にありました。令和３年度もコロナ禍の影響は続き、変異株が第５、６波と猛威を振るい、年度の前半の活動は見送らざるを得ませんでしたが、秋の２カ月（10、11月）になって漸く公民館での学修活動が認められ、子どもたちのために一生懸命に催し物を考えながら、その目的を達成されました。

令和４年度は、第７波、８波の影響を受けながらも、皆さんの努力が大きな実を結び、その成果が対面形式でのシンポジウムで発表されました。さらに熊本市生涯学習課の当時の大石課長様から、令和５年度に向けては、本メイクフレンズの活動を広域にわたる公民館との連携事業として展開されたい旨のご提案いただきました。そのおかげで昨年度までは４つのグループでの活動でしたが、今年度は５つのグループでの活動になりました。活動困難な時期を経ながらも、厳しい環境に適応されて来られた皆さんの強い意思が、着実にメイクフレンズ活動全体の発展に繋がっているものと確信します。

本日の午後の部の分科会開催の目的は、「メイクフレンズの活動をレベルアップするための取組みについて考える」とのことですが、本活動を通した皆さんの学びが、同時に子どものたちの充実した学びに向けられますこと、そしてお互いの意見を尊重しながら午後の部の活発な議論全体に繋がって行きますことを心から願っています。

最後に、本学部学生のメイクフレンズ活動に際し、熊本市教育委員会社会教育主事の諸先生（熊本市中央公民館 西村博生様、熊本市秋津公民館 兒玉見季様、熊本市南部公民館 宮﨑淳様、熊本市幸田公民館 森田欽也様、熊本市五福公民館 松田克彦様、熊本市東部公民館 村田真由美様）には一年間にわたるご指導をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。

また本日のシンポジウムでは、熊本市文化市民局市民生活部生涯学習課社会教育主事 魚住敏彦様に、本メイクフレンズ活動による事業全体を総括したコメントいただけますこと大変有り難く存じます。どうぞよろしくお願い致します。

本学部からは附属教育実践総合センター長の山城教授、そして本事業統括責任者の中山教授に一年間にわたって学生の学習支援にご尽力いただきましたことに厚く御礼申し上げます。

ユースワークとしてのフレンドシップ事業

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長　山　城　千　秋

本年度のフレンドシップ事業を振り返るシンポジウムが開催されますことを心より嬉しく思います。また、センター長としてみなさまの活動に直接的に関われるようになったことも喜びに絶えません。

さて、本事業は1997年に当時の文部省が全国の教員養成系大学・学部を対象に、学生が子ども理解を深め、教師としての実践的指導力の基礎を習得することを目的に、さまざまな体験活動をおこなう事業として始まりました。本学部では、メイクフレンズという学生主体の活動を中心に、学校現場ではなく社会教育施設と連携した事業であることが特色です。つまり、教育現場は必ずしも学校だけではなく地域社会もその一つであり、社会教育について学ぶことは、今日の「地域とともにある学校」、「社会に開かれた教育課程」と関連するものであり、活動を通して学校外教育や地域社会をより深く学ぶことができます。

「子ども・若者支援」が政策課題として浮上してから、すでに20年以上が経過しましたが、貧困や自立の問題などいまだ混迷の渦中にあります。国の政策が関心を寄せてきたのは、子どもや若者の「個人」のスキル・能力・意識の向上をはかることであり、本事業が大切にする「場をつくる」価値とは真逆であると言ってよいでしょう。すべての子ども・若者たちが安心して過ごし、やってみたいことに取り組めて、多様な他者と交われる「場」をつくり育てる。ユースワークの考えと共通する本事業は、あらためて評価される実践です。

その「場」をつくり出すのが、公民館における青少年社会教育の取り組みです。専門職である社会教育主事が伴走者となり、子ども・若者の信頼関係の構築をはかり、その関係に依拠して活動を展開する、そのような「場」をつくることがめざされてきました。それは、今回の各班のテーマ「輪」や「架け橋」に確認することができます。子ども・若者は「場」や関係に媒介されて育つものであり、「個性」を育てるためにも、豊かな場や関係性が必要です。本事業は、公民館が場を提供し、大学生がものづくりやレクリエーション、調理といった活動を通して子どもたちや地域社会との関係性を構築する学びを創造してきました。

若者支援政策がプロセスより数値的成果を重視し、求められる成果が個人対応であるのに対し、本事業は、子ども・若者同士の関わりやグループ活動のプロセスを明らかにし、集団としての学びの成果を重視することは、これからのユースワークにおいても大事な視点であると思います。学生のみなさんには、社会教育主事の任用資格を取得されて、学校教育と社会教育をつなぐユースワーカーとして活躍されることを期待しております。

最後に、本事業を物心両面からご支援いただきました、熊本市生涯学習課をはじめ公民館および社会教育主事、関係者のみなさまに感謝を申し上げるとともに、ひきつづきのご支援を賜りますようお願い申し上げます。